

# グローバルとローカルのあいだ

東長 靖

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

「イスラーム地域研究」の枠組みで、スーフィズム・タリカ・聖者信仰複合現象を研究するなか、マツチングファンでも利用して、各地で調査旅行を行ってきた。京大拠点は、イスラーム世界の国際組織／グローバル・ネットワークを研究テーマとして掲げている。私自身が率いている「広域タリカ」班は、グローバルに広がるスーフィズムやタリカを研究対象としているが、地域毎にさまざまな違いを見出すことができる。私自身は、そういった地域間の「ずれ」をいぶかしがりながらも、楽しんできた。今回は、そのことをスーフィズム、タリカ、聖者信仰のそれぞれについて語ってみたい。

## 一 スーフィズムとタサウフ

ここに掲げる写真は、パキスタン・カラチ市内の書店で撮影したものである。よく見ると、上の棚には「タサウフ」、下の棚には「スーフィズム」と書かれていることが分かる。これを見て、多くの人々は怪訝な思いをもつに違いない。同じものを、なぜ二通りの表現で書く必要があるのか、と。

そもそも、イスラーム世界では古い時代から、タサウフという表現が使われてきた。それをヨーロッパ語で表現する際に、スーフィーの語を元に、スーフィズムという語が創造され、用いられてきた。しかしこのスーフィズムは当初、イスラームとは異質のものとしてヨーロッパでは理解された。律法を重視するセム主義としてイスラームを理解し、これに対して愛を重視するアーリア的要素としてスーフィズムは理

解されたのである。したがって、スーフィズムはキリスト教と近い関係にある好ましい存在とされた。こういう考え方からすれば、スーフィズムは元々イスラームにあるものではなく、外からもたらされたものであるという「スーフィズム外来説」が唱えられたのは、ごく自然な流れだったろう。そこで、スーフィズムは「イスラーム神秘主義」と訳され、世界に普遍的に存在する神秘主義のイスラーム版と理解された



tasawwufとsufism (カラチのFazlee's書店にて)



マフドゥーミ・アーザム廟のチツラー・ハーナ（ウズベキスタン・サマルカンド）

のである。

近代に中東でスーフィズムが研究された時、研究者の多くがヨーロッパに留学し、そこで教えを受けた。いわゆるオリエンタリストたちの影響のもと、タサウウフは「神秘主義」の訳語として、新たな意味をもつこととなった。したがって、スーフィズムは単にタサウウフではなく、タサウウフ・イスラミーと表現されることとなった。これは「イスラーム神秘主義」の直訳と考えるべきだろう。タサウウフ・イスラミーと並んで、たとえばタサウウフ・マサイーヒー（キリスト教神秘主義）、タサウウフ・ヒンディー（ヒンドゥー教神秘主義）といった表現が用いられるようになっていく。たとえば、パキスタンの学者 B. A. Dar は、前イスラームの神秘主義を論ずるウルドゥー語の本のタイトルに、タサウウフの語を用いている。

この概念に挑戦したのが、同じパキスタンの学者 Latif Allah であった。彼は、フランスの碩学 マッスイニヨンらにならって、スーフィズムはイスラームに外来でなく、本来的に内在しているのだと考えた。いわゆる「スーフィズム内在説」である。彼は、タサウウフはイスラームに元々あるものだけを指すのに用い、ほかの世界の神秘主義の潮流を表すには用いない。神秘主義には別の *shiriyat* の語をあてたのである<sup>1)</sup>。

パキスタン以外でも、たとえばサファヴィー朝下のペルシアは、タサウウフの名のもとにタリーカ勢力を弾圧し、他方神秘思想に関してはエルファーンという別の

名前で呼んでこれを振興した。この傾向は、現代のイランにも受け継がれているだろう。

## 二 タリーカをめぐる言説

二〇一三年にウズベキスタンを訪ねた時のこと、多くの用語が別の意味で使われているのに大いにとまどった<sup>2)</sup>。私たちは、修道場や聖者廟を回っていたのだが、ハーナカーを訪ねてみても、まったく修道場らしくない。もちろん、ハーナカーはハーナーのウズベク語式の発音であり、その意味は修道場のはずであるが、どう見ても、ごく普通の礼拝の場にしか見えない。何度も、ここがハーナカーなのか、どこかほかの建物ではないのか、と問いただしたのだが、間違いはなかった。結果的に、少なくともこの時訪れた場所では礼拝場のことをハーナカーと呼ぶらしい、という結論を出さざるをえなかった。

また、タリーカの修行としてよく知られるものにお籠り（ハルワもしくはウズラ）があるが、お籠りがしばしば四十日間にわたることから、アラビア語ではアルバイニーヤ、ペルシア語ではチツラー・ハーナと呼ばれるのが普通である（それぞれ、四十を意味するアルバイーン、チツラが元になっている）。ウズベキスタンにも、チツラー・ハーナと呼ばれるものがあり、何箇所も訪ねてみた。その内の一部は、私たちの知るチツラー・ハーナと同じで、一人でお籠りを行う大きさであったが、それよりも、十人か二十人が入れそうなものの方が一般

的であった。独居でお籠りをする場所とは、断じて思われない。何箇所もこういうチツラーハーナを訪ねると、頭がぐらくらくしてくるような感じがしたことを覚えてい

る。同様に、ズイクルは教団のメンバーが集まって行うものではなく、家族だけが祖霊のために行うものだというインフォーメントもいたし、オホン（アホンのこと。ペルシア語のアーホンドに基づく）は宗教指導者でなく、ズイクルをする人のことだという言説も得られた。

中国西北部でも、興味深いインタビュを行うことができた。私たちの訪ねた華寺拱北（拱北はペルシア語のゴンバドに由来するが、中国では修道場を指す）はフイーヤに属する。私たちの常識からいえば、フイーヤはナクシユバンディー教団の一派であり、無声もしくは低声でズイクルを行うことに特徴がある。しかしこのシャイフは、自分たちはナクシユバンディー教団ではないと断言したのみならず、スフラワルディー教団だと述べたのである。これには正直言って度肝を抜かれた。

ちなみに、通常のズイクルを「舌のズイクル」とすれば、フイーヤのズイクルは「心のズイクル」とされ、無声で行うというのが一般的な理解であるが、中国でのインタビュによれば、明念が前者にあたり、黙念が後者にあたる。しかしそれだけでなく、明念はさらに、高声／低声、もしくは高念／低念に分かれる、という言説が

多く聞かれた。ここでいう高／低とは、音の高低ではなく、大きな声か小さな声かということである。高念はシャーズイリー教団のものであり、低念はフイーヤのものであると語るシャイフもいたが、シャイフ達の語ることはさまざまで、フィールドでの言説を整合的に理解することは困難な

だった。こういった現象を、現地の人々の無知に帰することは簡単ではあるが、実際に彼ら

がそのように語る以上、彼らには私たちの知る「歴史的事実」とは異なる、彼らにとっての事実が存在するのだろう。histoire は history であるのと同時に、story でもあるとよく言われるが、その実例をここで実見することになったのである。

### 三 現代における聖者信仰

私は一九八〇年代にエジプトに留学したが、エジプトのナシヨナリズムはアラブ・



華寺拱北（中国・陝西）



真新しいバハーリー廟 (ウズベキスタン・サマルカンド)

ナシヨナリズムの流れを汲んで、むしろ世俗的なものだったと思う。しかし、パキスタンやウズベキスタンなどに行くと、聖者廟を利用した宗教ナシヨナリズムが多く見られることに驚く。

たとえば、ウズベキスタンのサマルカンドにあるバハーリー廟は、近年大規模な修復が行われ、華美なものになっている。同様に、マートウリーデー廟もけばけばしく修復されており、日本人の感覚からすれば、なんとなく有難味に欠ける。しかし現地の人々は大勢参詣に来ており、それはむしろ物見遊山に近いだろうが、国の誇りを感じているように思われた。

上に挙げた聖者廟の主は、いずれもスーフイーではないが、それ自身は私自身が長年主張してきた、non-Sufi saint 論にそぐうものである。聖者とスーフイズムをアプリーオリに結び付けることに警鐘を鳴らして続けてきたので、このことに違和感はない。しかし、二〇一四年の夏に、NIHU機構長裁量経費の援助を受けて、第四回中東研究世界大会に参加した後、トルコ中部で聖者廟調査をしていて、私自身の偏見に気づいたことがある。それは、スーフイーやウラーマリーまではなんとか興味もてるのだが、為政者の墓になると、とたんに興味がなくなるのである。その人の経歴などを説明されても、全然感興が湧かない。聖者はなんらかの意味で常識を超えたような力をもつ人であり、インドネシアのスカルトなどを考えれば、各地の為政者が聖者化されていることを考えれば、出自によって聖者を区別する

のは現地のムスリムたちの感覚に反する、と主張しているにもかかわらず、自分自身は為政者の聖者には関心をしつかりもてないのであった。

こういった反省は、日本で本を読んでいるだけではもちろん得られないし、ふだん行き慣れている場所ばかりに行っているも、気づかされることはない。やはりフィールドに、それもイスラーム世界のあちこちのフィールドに実際行ってみてこそ、感じられることである。何年たっても新しい発見はあるものだと、フィールドに行く度に感じさせられることであった。

【註】

- (1) Carl W. Ernst, *The Shambhala Guide to Sufism*, Boston and London: Shambhala, 1997, pp. 204-205.
- (2) この調査は、科研費基盤研究(B) (研究代表者・赤堀雅幸)「近現代スーフイズム・聖者信仰複合の動態研究」により、二〇一三年九月に行った。
- (3) この調査は、科研費基盤研究(B) (研究代表者・川本正知)「アフマド・スイルヒンデーとムジャッディデーヤの調査研究」により、二〇一四年八月に行った。